2016 年リオデジャネイロパラリンピックに参加して感じた事。2020 年東京オリンピック・パラリンピックに向けて思うこと。生徒たちに伝えていきたいこと。

附属視覚特別支援学校　　寺西 真人

今回も本来の趣旨から外れるが、リオデジャネイロパラリンピックに参加して感じた事を紹介したいと思う。

自分は、アテネ大会から 4 大会連続パラリンピック日本選手団水泳コーチをさせていただいた。身に余る光栄なことであると思いつつ、日々責任から押しつぶされそうな生活を送ってきた。正直ロンドン後も、長い 4 年間であったと思う。

本校からは多くのパラリンピック選手を輩出してきた。それだけに他の学校よりパラリンピックは身近なものである。一方で身近過ぎてパラリンピックの規模や世界最高峰の大会である認識が薄れていた傾向もあった。2020 年東京が決定し、更に、オリンピック・パラリンピックと横並びに報道され、更にリオデジャネイロパラリンピックの様子がテレビ放送されたおかげで認知度が急激に増したと感じている。

今回、水泳競技では 2 人の卒業生が参加した。一人は小野智華子で北海道から水泳を意識して上京してきた。決して本校は練習環境が整っている訳ではないので進路相談の時には勧めなかったが、地元でも環境が整っていた訳ではなかったので、専攻科から入学をしてきた。ロンドンの時に 100m 背泳ぎで 8 位 (その時の金メダルは秋山里奈　本校卒業生) でリオに挑戦したが今回も同じく 8 位という結果だった。記録は 3 秒近く伸びているが、世界も伸びているのと国家試験と練習のピーク時と重なり思うような結果が残せなかった。

もう一人の木村敬一は 4 個のメダルを獲り、国内を賑わせた。ロンドン大会で 2 個のメダルを獲得していたので　オリンピック選手の指導経験のある専門家にコーチをしてもらい、金メダルを目指したが、残念ながら、銀 2 個、銅 2 個という結果に終わった。

女子ゴールボールでは　本校卒業生から、若杉遥、天摩由貴の 2 名が参加した。ロンドン大会では金メダルだったので　注目されていたが 5 位という結果だった。天摩に関してはロンドンでは陸上の短距離で出場したが、その後陸上の練習環境が無くなり競技変更をしての参加だった。また陸上では高田千秋が、マラソンでは堀越信司が参加し入賞した。

先にも述べたが年々競技レベルが向上し学校のクラブ活動の延長上では参加できないレベルにまでになった。学校を卒業後も練習を続け出場を目指す選手が多い。

木村敬一選手と表彰後

木村選手レース直前

今回のリオデジャネイロパラリンピックはテレビ放映されていたので、大勢の人が見てもらえたことは非常に有り難く感じている。自分の職場でもパラリンピックスポーツがどのようなものであるか知る機会は少なく、大会に生徒引率の経験をするか練習を見学に来るしか方法が無かった。今回が特別なことをしていた訳でもなく、いつもと同じことをしていたのだが、

2020 年東京オリンピック・パラリンピックが決定したおかげで注目度があがり反響が大きかったと思う。

水泳会場は　前評判ではチケットが売れていないと報道されていたが　いつもと同じ、いやそれ以上の観客からの声援を受けた。ブラジルの人達はスポーツ観戦に (特にサッカー) 慣れている。競技によってはサッカーと同じに応援されると選手にとって迷惑なこともあるが、応援されて選手は嫌な気持ちしない。地元ブラジルの選手の時は、会場が壊れてしまうのではと思うほど足踏みと大声援を送り、3 位以内のメダルを獲った時は隣の会場まで声が鳴り響いていた。また、他国の選手でも世界記録が出そうな時や、最後にゴールする選手にも惜しみない拍手を送っていた。あまり日本国内の大会では見かけない事である。

2020 年東京の会場でもこのような声援が送られるのだろうか心配の一つである。

選手村内で天摩・若杉選手

選手村食堂で小野選手

特に今回の大会で気になったことは、選手たちの結果だけに一喜一憂し過ぎではないかと感じた。ワールドカップのラグビーの時も同様に感じたが、お祭りかなと思ってしまった。日頃の選手の様子や練習、また予選会の様子など知っている人たちが結果に感想を述べられるのには抵抗はないが、日頃の練習も知らずにテレビだけで感想や意見を述べられたりされたのは、しっくりと来なかった。(テレビ放送の影響で有り難いと思っているが)

東京に向けては、クラブ活動を通して、競技をもっと知ることや、練習の様子や国内の大会など見学や応援に行く気持ちが育たないと中身のない自国開催になってしまうのではと危惧する。

学校の生徒達には、授業でパラリンピックスポーツの教材では世界のレベルはどのくらいなのか、そのレベルに近づく為には、日頃どんなことをすればよいか、そのためにどんな生活やトレーニングをしているのか等より具体的に身近なことから情報を提供して興味を持たせたいと思っている。本校の生徒たちはテレビをあまり見ないが、ラジオ・ネット情報などで知ることが出来るので、国内の選手だけでなく、海外で頑張っている選手たちや、また別の障害を持っている人たちの努力や工夫などを知ってもらい、競技者とは異なる視点でも自国開催を感じてほしいと思う。

最後に自分のことでもあるが、今までのパラリンピックでのべ 30 個以上のメダルに関わってきた。東京でもなんとか在校生をパラリンピックに出場させたいという気持ちはあるがほぼ絶望感で諦めている。OB や OG の現選手のスキルアップで出場しか望めそうになく自分が一番希望していた若手育成の道が全く見えない。競技によって異なると思うが競技を始めてから国内のトップクラスレベルに到達するのは 5 年近くの年月が必要で胸に日の丸をつけてアジアで国際大会を経験しアジアのトップクラスになってパラリンピックが見えてくる事を考えると 7 年間は競技に没頭しなければならない。ブラインドの子供たちは他障害の選手達よりスキル向上・習得に時間がかかる。このことを知らないコーチ陣も残念ながら多数いるのが実情である。

他競技では中途障害の選手たちも多いのだろう。視覚障害では先天的な障害を持つ視覚特別支援学校在籍者をいかに競技者として育てていくかが、今後のカギになるが残念ながら練習場所や専門的な指導者不足はなんら変わっていない。

練習場所・練習環境の整備と指導者不足の改善が行われなければ、ブラインドスポーツアスリートの卵たちの未来はなかなか見えてこない。2020 東京までに良い方向に発展していくことを切に希望する。